うたらば

短歌×写真のフリーペーパー「うたらば」

2026.11 vol.43

TAKE FREE



今回のテーマ

相棒

短歌とは

５・７・５・７・７の５句３１音のリズムで詠まれる短い抒情詩。
俳句で使われる「季語」は不要。
古くは奈良時代から身分の貴賤を問わず親しまれ、
現代でも日々の想いを綴る詩形として幅広い層に詠まれています。

一方で、その長い歴史を国語の授業で習うこともあり、
短歌とは難しいものである、と思っている人もしばしば。
このフリーペーパーは「短歌をよく知らない人」に
現代短歌の面白さに触れていただくために作ったもの。
軽い気持ちで、ぜひページをめくってみてください。

作品テーマ

相棒



信頼してる
愛着がある
離したくない
すべてのものへ



ぼくはきみがいないと困る
きみもぼくがいないと困っててほしかった

この距離感の
もどかしさに
たぶんあなたは
気付いていない

短歌：畑　依裕



ちょっと黒い気持ちを受け止め続けてる
裁縫箱の赤い針山

ぷすりぷすりと
針山だけに
知られてしまった
本性がある

短歌：杜野詩季



右の手の中指でつい触れている
Kのキーだけつやめいていく

当然のような
接し方でも
変わってしまう
ことだってある

短歌：藤原ほとり



寄り添ってゐるよと告げてゐるやうに
眼鏡はかほのかたちに歪む

なるべく自然に
寄り添えるよう
自分を変える
覚悟はあるよ

短歌：朧

ゲンガーはゲームボーイの中にいて
ずっとわたしを待っててくれた

忘れてたこと
謝ったりして
また相棒に
戻れたらいい



短歌：石川真琴



君の部屋にIKEAのサメが馴染む頃
わたしの部屋にもなる行くぞサメ

頼んだぞって
送り出す
重大任務を
委ねた刺客

短歌：夏野ネコ

佳作集

相棒①

プロンプト？とか言わないで冷めるじゃんゥチらそーゆうことぢゃないじゃん／間

月ひとり見上げる夜の寄る辺なさキャッチを失くしたピアスがひかる／古澤茅世加

メーターの辺りを撫でる一戦を終えた競走馬にするごとく／田中りょう

2軍落ちして10年になるシャツを着て履歴書を正座して書く／中村マコト

お互いに歳をとったな起動するたびにあちこちから音がして／たろりずむ

二十五年刻まれていたイニシャルが変わるねさようならボールペン／遠野あめ

絡まったまま2年間つけているネックレスだけが知っている傷／川島愛弓

人間でいえば100歳異世界の道を教える古いカーナビ／立田渓

片隅で弱音を吐けば傍らでそっと回収していくルンバ／三木絵糸

主語のない話も理解してしまう共に増えゆく皺と思い出／はるようこ

ライナスの毛布みたいに金棒を抱える鬼が何割かゐる／桝枯井戸

おじいさんの時計をもらう　納骨の後で静かに狂うのでしょう／短歌パンダ

これからも一人で生きていくために明日の私と分け合うパピコ／都季

父さんとサシでお酒が飲めるほど深い挫折はまだ知らぬ僕／ポルケ・ポリンヌ

よだれとか涙で今日も濡れたけどアンパンマンは替えがきかない／雪風みなと

センター街を駆け抜けた日の熱量でベビーカー押す君は無敵だ／殿内佳丸

おはようと言いたいけれど寝てるから口パクをして寝室を出るよ／中嶌浩雅

「こん」という名のぬいぐるみ　きっといま砂丘の夢を見ているでしょう／逢

レベル5のフシギダネから始まって進化をせずに30歳へ／松﨑通彦

なにもかも叶えてしまう道具より膝に丸まる三十八度／セロ





息継ぎの下手なあなたを待つような
リズムで点滅してる信号

慌てるほどに
辿々しくて
信号までも
ハラハラしてた

短歌：箭田儀一



「死にたい」と「生きたい」は韻を踏んでるね
どちらだろうととなりにいるよ

何もなくても
そばにいることを
二人の意味に
できたらいいね

短歌：渡邉泰明



おじさんはじいちゃんになり

スピッツがチワワになった同じ散歩道

ゆっくりと
噛み締める
移ろうものの
儚さのこと

短歌：森岡さや



ラーメンで手懐けられたふりをして

今夜は愚痴を聞いてあげるよ

短歌：くらたか湖春

寒椿　恋のひとつを失くすたび

泪みたいに落ちる花首



ながく心に
あった気持ちが
あっけなく散る
戻れなくなる

短歌：玖嶋さくら

佳作集

相棒②

絶対はないけど僕ら恋仲を選ばず今日も割り勘のサイゼ／麻数
相棒は結婚式に呼ばないが多分葬式には来るだろう／宇祖田都子
台風が温帯低気圧になるみたいに恋が友情になる／関根裕治
どしゃぶりの夜を二人で漕ぐ男子いましか出ない大声の歌／齊藤智都
あんパンとやきそばパンをそれぞれにかじって昼の定点観測／十条坂
指しゃぶりするときいつも触ってた吾子のタオルはついに糸くず／持田圭
守られることは弱さを見せること毛繕いみたく日傘を畳む／あきたまさひろ
うちがわが乾ききるまで三日待つぬいのかわりに抱く文庫本／稲葉ゆい
いくつもの〈内緒〉問われず問い詰めず平穏無事な夫婦で暮らす／風花 雫

夏空を仰いでばかりいる日傘　前向きという言葉のおそろしさ／君村類
スーパーの外で待ってる愛犬は風を手に入れたご様子です／大橋奥文
ライターにオイルをそそぐこれからも俺の寿命を燃やして欲しい／ナカムラロボ
「この薬今日からあなたの相棒です」ふんわり告げた医師の真心／やすわ　りんせい
最後までクルマは道具という女(ひと)を好きだったけど愛せなかった／須磨蛍
（（ガリガリ君ソーダ食いてえな）って今思ってるな）って思われてるな）／小緑 悠
四季をめぐるふたり暮らしの乗務員としてあなたが生けている花／中山史花
ひと皿を洗うあなたと拭くわたし皿だけ先に仲直りする／ゆりなあと愉快な船
（みんなにはないしょだよ）から始まって新婦友人代表である／氷吹けい
親友っていうか相棒だよなって言われて恋は窒息させた／牧角うら
面識のない男女から父母になるまでにひたすら鳴る本坪鈴／星野珠青

読む。

「月刊うたらば」より

文・田中ましろ



海水と同じ濃度の塩水に浸かる浅蜊が死に気づかない

（ふうらい牡丹）

浅蜊にとっては海の続きでも、人間にとっては調理の始まり。海水と同じ濃度に整えるという手順で、浅蜊はこの先の死に気付けない。その隔たりにハッとさせられます。おいしく食べるための、ごく普通のひと手間。そこに死へ向かう時間を見つけた視点が、日常の景色を少し怖くしています。

ビルダーがこれ見よがしに披露する上腕筋にある虫さされ

（関根裕治）

鍛え上げた筋肉を見せている本人は、まさか虫さされに注目されているとは思っていないでしょう。誇らしげなビルダーと、そこに小さな虫さされを見つけてしまう主体。その視線のずれが絶妙です。どんなに鍛えても虫には刺される。当たり前のことなのに、立派な筋肉が急に親しみのあるものに見えてきて、思わず笑いました。

見つけてね／帰らないでね　信頼が鬼と私にあるかくれんぼ

（桝枯井戸）

隠れる側と探す側に分かれて勝負するかくれんぼにも、相手への信頼がある。そんな気付きがあった作品。見つけるまで探してくれる、見つかるまで隠れていてくれる。どんな遊びも互いにルールを守るからこそ成立するんですよね。勝ち負けの手前にある約束を、二つの「ね」がやさしく伝えています。

溢れ出る涙があればわたしというふくろに穴があったのだろう

（十条坂）

涙が出るのは、悲しみで心がいっぱいになったから。そう捉えることが多いですが、この歌では自分というふくろに穴があったのだと考える。その視点が素敵です。溢れた涙を拭いても、その穴はきっと残ったまま。「あったのだろう」という推測に、自分のことなのによく分からない、心許なさも感じます。

ペリエにも遠い水源あるように僕の知らない夏を持つ君

（武久英人）

目の前のペリエにもここへ届くまでの遠い道のりがある。そこから、「君」にも僕と出会う前の夏があったのだと思いを馳せる展開に惹かれました。知らない過去を寂しがるだけでなく、遠い水源のように今の君へつながるものとして見つめている。「夏」という一語が、その時間に水面が輝くような情景や空気感を与えています。

水星は水色じゃない「わかる」って私の何がわかるんですか

（ナカムラロボ）

同じ「水」の字があっても、水星は水色ではないように、言葉の表面だけではその中身までは分からないことがほとんど。そこへ「わかる」という軽率な返答が続くことで、分かった顔して近づいてくる相手への苛立ちがよく伝わります。一見つながらない上の句と下の句が、理解や信頼とは何かという一点で結びつく、計算された距離感が見事な作品です。

電話から聞こえるきみの発声が明朝体で慌てて帰る

（てと）

声を文字の形で伝える比喩が効いている作品。声を聞いて感じた「明朝体」はゴシック体と違って格式があり、カチッとしていて、妙に改まっている感じ。話の内容は描かれないのに、それが普段と違う声なことは明白で、「慌てて帰る」という行動によって主体がその声の変化に敏感に反応してしまうという二人の関係も垣間見えて微笑ましいです。

レジ袋を断るときの自然さで大丈夫って答えてしまう

（吉村のぞみ）

レジ袋を断るときの「大丈夫です」は、ほとんど考えずに口にする言葉。その自然さで、自分を気遣ってくれる周囲の言葉にも返答してしまう。平気なふりをしようと構えるより先に無意識の「大丈夫」が出てしまう危うさを、誰もが知る身近なやりとりから伝えた比喩が秀逸です。「しまう」に主体の本心がすべて詰まっていますね。

「おふくろ」と紹介されて「おふくろ」の顔で息子の彼女に微笑う

（風花　雫）

彼女の前で息子が選んだ呼び名は「おふくろ」。母親である主体もその呼び名に応える顔になる。「お母さん」ならきっと「お母さん」の顔をしたはず。少し格好つけた呼び方に息子の成長を感じる、新鮮で嬉しい瞬間だったのでしょう。同じ「おふくろ」を繰り返すことで、息子の言葉を受け止めて微笑むまでの母親としての心の動きが伝わる秀歌です。

白足袋をゆっくり脱いで住職はお布施の金額を確かめる

（泰源）

住職もまた檀家の方々からお金を受け取り暮らしているひとりの人間。白足袋をゆっくり脱ぐ姿には、法事の延長のような厳かな空気がありますが、そこから自然とお布施の金額を確かめる動作へ移っていく。その展開が絶妙です。批判するような言葉を添えず、ふたつの動作だけを並べることで、読者にクスッと笑える可笑しみを感じさせています。

短歌募集中

「月刊うたらば」では、いつでも作品を募集しています。毎月変わる投稿テーマにて、短歌作品をぜひお寄せください。今月のテーマや募集要項などの詳細は「うたらば」公式サイトをチェック↓



この傷と死ぬまでずっと寄り添うと
決めて鏡をまっすぐに見る

戦ったから
生まれた傷は
誇らしいって
思わないとね

短歌：田中ましろ

編集後記

今号も最後までご覧いただきありがとうございました！今回のテーマは「相棒」。テーマ設定した狙い通り人間だけじゃなく動物から雑貨まで様々な相棒が登場して、相棒という距離感だからこそ見えてくる関係性とストーリーを楽しめる面白い一冊になったのではないかと思います。

急な依頼にもかかわらずスケジュールを調整して撮影対応してくださった女優のあいだあいさんにもたくさんの感謝を。

次号のテーマは「年齢」。生まれてから死ぬまでずっとカウントされる年齢からどんな短歌が生まれるか。皆様の作品を読むのがすごく楽しみです。今後とも『うたらば』をよろしくお願いします〜！

企画・写真・詩・デザイン
田中ましろ



うたらば vol.43【相棒】　2026 年 11 月 1 日発行
○企画・撮影・編集 / 田中ましろ　@mashiro_tanka
○モデル / あいだあい　@ai_da_ai　@aidaai0330
○短歌 / 投稿者の皆様

@utalover　https://www.utalover.com/


短歌は
もっと
自由になれる